

木造阿弥陀如来像

阿弥陀如来像は、阿弥陀寺の本堂の祭壇の右側にあり、政府によって重要文化財に指定されています。

寺院より古いこの像の正確な起源、そしてどのようにここに安置されるようになったのかは不明です。

像の作りから、平安時代後半（794 -1185）の特徴が多くみられるが、鎌倉時代前半（1185 -1333）に彫刻されたものであることを示しています。彫像の仏陀は目を薄く開いて、耳たぶが細長く、唇の赤い色は元のままです。

木に金箔が施され、仏の位置、「来迎」と呼ばれる手のポーズは、死にゆく人々を像が天国に迎え入れていることを示しています。

本堂の主祭壇には、阿弥陀寺を建立した禁欲僧である弾誓上人が創作したとされる完全像があります。1613年に死ぬ前に造られた像の頭にはまだ弾誓の髪の毛が付いています。

像の上半身にまだ見える黄金の葉の斑点は、像の主題である弾誓が仏陀と同じレベルの悟りを開いたことを示しています。

もともとは、今日の愛知県出身である弾誓は、封建時代の日本で最も低い階級の人々、例えば、鋤夫またはその他の「汚れ」される職業の人々に教えを説くことを選択しました。これにより、弾誓自身が上流階級に排斥されました。また彼は、阿弥陀仏の名前を記した札を約 400 万幅作成し、信者たちに配布し、教えを説いたことで有名です。